



FMヨコハマ

## 『たまらなく、AOR』

毎週火曜24時ON AIR

田中康夫がDJを務めるAOR愛に満ちた30分。テーマに沿って自ら厳選した楽曲はもちろん、田中康夫の落ち着いた語り口、余韻を排した曲解説で、一日の終わりと始まりを静かに過ごす洗練された大人たちへ「クワイエット・ストーム」な癒やしを届けてくれる。  
<http://tanakayasuo.me/aor>

80年代の伝道師が語る、“アーベインな”音楽論

# 田中康夫のAOR愛 ディーセントな

80年代、都市文化と密接に絡んだAOR黄金期を語る上で欠かせないのが作家の田中康夫だろう。その作品で都市型消費社会を鋭く批評する一方、自ら番組を持つほどのフリークである氏にとってのAORとは

取材・文／池上尚志 写真／下田直樹

田中康夫とAORがそのまま結び付く人は、ある一定以上の世代だろう。田中は80年に小説『なんとなく、クリスタル』で作家デビュー。そのハイソな世界観ばかりが取り沙汰されたが、今となってみれば、そのなかに社会批評的な視点を潜ませていたことに気付くし、それが後の政治活動に繋がっていたのかもしれない。

それらの小説の背景を彩り、時代の隙間で潤滑油のように機能していた音楽がAOR。田中康夫4作目の小説として84年に出版された『たまらなく、アーベイン』は、小説の形を借りたAORディスクガイド本であり、長らく絶版になっていたが、菊地成孔の二度とやって来ない時代のライフスタイル読本」という名「コピーと共に、15年に復刊。また、同年、FMヨコハマでは『たまらなく、AOR』がスタートする。それはいわゆるイデオロギーとは無縁の都会的で洗練された、しなやかなメッセージ（中略）私たち1人ひとりは微力かもしれない、でも決して無力なわけじゃない」という、番組のオープニングで毎回語られるこの口上こそが、田中流のAORのマインドなのだろう。

10年代という時代になって再び注目を浴びているAOR。田中康夫にとってAORとは何か。AORは社会や時代とどう絡み合い、どんな役割を担ってそこに息づいているのか。様々な場面のなかに出現するAOR的な価値観と

は何か。あるいは、田中康夫流のAOR社会論。その言葉の意味を紐解くと、確かに存在するある種の人々の姿が見えてくる。

## 「声高に語らない人たち」によりAORが見直されている

——「たまたまなく、アーベイン」の頃に3000枚コレクションしているということでしたが、今はどのくらいレコードを持つていらっしゃるんですか？

田中 この番組では5000枚という言い方をしていますが、もうちょっとあると思います。

——アナログ盤のみですか？ ほとんどがAOR？

田中 基本的にはそうですね。10枚くらいクラシックや、25枚くらい日本のアーティストのアルバムもありますが、一応この番組では70年代後半から90年代をかけるので、あまり最近のは買わないですね。CDは家に50枚くらいしかないかな。我々の頃は、車のなかで流すオリジナルのカセットテープを作ったよね。どっとう順番でどういう曲を入れるかを考えて、手書きで曲名とアーティスト名を書いて。それを好きな子とかにプレゼントする。懐かしいね。今では自分でCDRを焼いて作れるんだらうけど、あの手作り感を今の人が味わえないのはちょっと寂しい気もするなあ。

——今手元にラモンド・ジャリーのレコードがありますね。80年代にはあまり注目されていなかった作品ですが、番組でかけるんですか？

田中 今日日はモータウン・サウンドの黄金時代を築いたラモンド・ジャリーの特集で、翌週がPOINTER SISTERSなので、倉庫にレコードを取りに行ってきました。家には置き切れないので、倉庫に置いてあるんです。

——田中さんはAORをリアルタイムで聴いてきた世代ですが、田中さんにとつてAORとはどんな音楽ですか？

田中 この番組は火曜深夜の放送なんですけど、最初に僕が喋る口上の内容に尽きると思います。AORというのは、一般的にはアダルト・オリエンテッド・ロックとかアルバム・オリエンテッド・ロックと呼ばれていますが、最後に「ロック」と付いているんですよ。アダルトは都会的、洗練されたという意味に捉えられていると思います。AORを聴いていたのは、僕や少し下の世代。団塊の世代と団塊ジュニアの間の我々は、階段の世代と呼ばれる踊り場のようなものなんです。学園紛争の時代を生きた人たちの群れ方とは違う。その一方で、個人主義を声高に言うわけでもない。しなやかな思いで1人ひとりの自分が大切だと考える世代かな。自分にとつて心地よい音楽や洋服、あるいは考え方がそうであるように、べったり徒党を組むわけではないけれど、そういう人た

ちと共通する会話の潤滑油みたいな存在を大切に

する感覚がありました。そうしたアイコンのつがAORだったと思うんです。『なんとなく、クリスタル』が描いた高度消費社会は、量の拡大という高度経済成長時代から脱却して、これからは質の充実を目指すのだと。数字ではなくて心の利益率、幸せの利益率を高める時代にしていくよという時代の流れでした。拳を上げて声高に「正義」を語ろうとするそれまでの

世代の音楽とは違う思いが、AORだと僕は思っています。イデオロギーや主義主張ではない。それまでのロックの音楽評論は、そこにどんな訴えがあるかを論じるわけです。確かにそれも大事かもしれないけど、英語の細かい言い回しはわからない。だからと言って歌詞の内容を無視するのではなくて、その音



楽から受け手が1人ひとり、自分のなかで膨らませていく感覚の大切さ。『たまたまなく、アーベイン』で書いたのも、雨が降っている日曜日のお茶を飲みながら聴くのになさわしい曲や、夕方の海岸で、ガールフレンドを隣にさせて車を走らせているときになさわしい曲。3回目のデートで、うまく進展すると



思ったんだけどただ送っただけで終わってしまい、夜露に濡れている首都高の道路を疾走して帰るときにふさわしい曲とか。それぞれの、さまざまな想い出をじんわりと呼び起こしてくれるのが、AORという音楽だと思っています。

——ここ10年くらいでAORが盛り返しています。今の盛り上がりはどう見えていますか？

**田中** アナログのレコードからデジタルなCDへの変化、そして距離や時間をいとも簡単に飛び越えてしまうインターネットの社会のなかで逆に、「ささやかだけれど、確かなこと」を確認できる

機会が減ってきてしまった。SNSで瞬時に繋がっているはずなのにね。しかも双方向、そして多面的に意見を交わし合うツールだったはずのSNSが、ともすれば一方的な主張に終わり、あるいは不毛に叩き合うエネルギーばかりが氾濫している。年齢に関係なく、そうした世の中の空気にちよっと疲れていたり、ちよっと居心地が悪いと感じている人々の間で、今またAORが見直されている気がしています。

——この盛り上がりのなかで、どういう目的を持って番組を始めたんですか？

**田中** それはそこにいる（放送局の）偉い人が、こういう番組もたまにはやるか、と思ったから……かどうかは知らないけど（笑）。

——では、話が来た時に、どんなプログラムにしようと思いましたが？

**田中** クラブと呼ばれる前のディスクの時代、スローバラードが流れるチークタイムになると、ダンサブルなナンバーでは秀逸な選曲と繋ぎの技術を誇る優秀なDJの人でも同じような曲ばかりで、もう少しメロウでリリカルな曲があるのにならなくて思っていたんです。僕のなかのAORはそういうもの。担当ディレクター

が言うには、僕の選曲パターンは、ギターよりもピアノの旋律が中心で、ゆくり入っていて徐々に盛り上がっていく曲が多いらしいんです（苦笑）。エリック・カルメンの「Boats Against the Current」という曲がありますね。恐らく、あの辺りが田中康夫の中ではギリギリ限界として許される「ポピュラー・ソング」なんですよ。「どんなに困難や抵抗という波が高くても、その流れに逆らって小船を漕いでいくんだ、僕たち2人は」という内容です。涙腺が緩んでしまうメロディアスな曲調でありながら、若者の崇高な純粹さの高まりと哀しみというのかな、それが過度に聴き手におもねるわけでもなく、踏み留まっている楽曲。ギリギリ限界などとは不用意に語ってしまいましたか、こうした懐み深さがAORの本質であり魅力なのだと思えます。

——著書の『たまたまなく、アーベイン』のように、様々なストーリーという日常があるなかに音楽があつて、BGMというよりも、生活と密接に繋がりのあるもの、ということですか？

**田中** なるほど、おっしゃるとおりですね。今、尋ねられてハツとしました。実はAORとは最も汎用性のあるコモディティみたいなものだと思います。ロックのように取り立てて「個性」が強いわけではない。どのアーティストにも共通する心地よいメロディライン。でも、そうしたサウンドが世の中の日常から消え

てしまつたら、なんだか味気なく、寂しく感じてしまふ。それがAORでしょうか。

——この本に書かれていることは、当時の時代の空気のようなものを切り取ってみせた内容が多いと思います。その当時とは時代背景が全く違う今の時代に、AORは同じものとして求められているのか、違う形で受け入れられているのか、どうなんでしょうか？

**田中** 同じであつて同じじゃないのかもしれないし、同じじゃないものを求めているわけでもないと思うんです。私のHP (<http://tanekayasuo.net>) を訪れていただく、この番組で初回からかかった全ての楽曲のジャケット写真とYouTube音源へのリンクが載っています。曲名やジャケットを見て直感的に、これ、自分の感覚かもって思った曲から入っていく、いかもしれません。最初は手探り状態でどこかで名前を聞いたことのあるアーティストから入るかもしれない。ジャケ写にビビッときて選ぶかもしれない。でも、1曲1曲、自分で選んで聴いていくうちに、どんな具合になるのか見当もつかなくなつたジグソーパズルが、徐々に組み上がっていくのがAORの楽しみ。しかも、意外なことに違うジグソーパズルから始めた人とも同じ境地にたどり着ける、というものもAORらしさ。ジャズでもない、ロックでもない、AORという音楽の奥深さですね。

085 別冊カドカワ DIRECT

## 排除するのではなくて 調和させていくのがAOR

——ラジオでかけてらっしゃるのはスローな曲が多めですね。

**田中** 午前0時からという時間帯ですからね。アメリカではAORはクワイエット・ストームとも呼ばれています。慌ただしかった1日の喧噪の後の、ほっと一息つく時間帯の静寂さに似合う音楽というニュアンスですね。7枚のお勧めアルバム(P97)のなかでご紹介しているマークIIアーモンドの『OTHER PEOPLE'S ROOMS』のジャケットのように、向かい側の集合住宅のお部屋が道路越しに見えていて、テレビをつけている下着姿の女性が裏側のジャケットになると驚いてこちらを見ている。ちよびり後ろめたいけど、ドキドキしてしまう胸の高まり。こうした形で二つひとつの楽曲と触れ合っていくうちに、自分で自分の地図を作っていく。それがAORです。ロックやとりわけジャズは音楽としての流儀とか文法にこだわるけど、そういうのはちよと堅苦しくて苦手だな。と。流儀も自分の地図を作る上で通る場所なんだろうけど、流儀のところだけで我慢し合ったり論争したりするのではなくて、全然違うシーンにも次の瞬間に容易に入っていく。それがAORの感覚かなと思います。

——AORはアーティスト名で聴く音

楽というよりも、どこか匿名性がある印象がありますね。

**田中** その昔から僕は、大きな声で正義を語る人には、実は本音と建前の表裏の嘘があると思っていてね。この微妙な感覚に微笑しちゃう方にピッタリなのがAORだろうと思いますね。小学校の算数で「ベン図」って習ったでしょ。クラスではおぼろげ好きな人、縄跳びが好きな人、色水遊びが好きな人、実はみんなちよとずつ重なり合っている。その違う部分と同じ部分を含め合う。社会の音楽がAORなのかな。色水も縄跳びもクラス全員が好きでした。話になると、右向け右か左向け左の、ちよと怖い社会でしょ。AORは声高に主張しないけれど、でもしなやかな自分の強さを持った音楽なの。排除するのではなくて調和させていく。そういう心意気ですね。

——一部でそのAORをノスタルジーのように扱っていることについてはどう思われますか？

**田中** 別にそれはいいんじゃないですか(笑)。その方たちを排除する必要はさらさらないでしょう。その人たちはその人たちが、我々とは違う山の登り方や違う車や移動手段を使っているのかもしれない。でも成熟した1人の人間として最終的に行き着くところは同じなんです。それをも全部受け入れていくマチュアード(matured)成熟した感覚がAORだと思っし、番組の

前口上でデーセント(decent)という単語を使っているように、それなりの自分の誇りはあるけれど、それをことさらに自慢するわけではなく、密やかに謙虚な誇りを抱いている心意気。まさに「デーセント」慎み深い誇り。それがAORです。冒頭でもお話ししましたが「ささやかだけど、確かなこと」を確かめられる音色。高度資本主義の世の中は、誰をも歯車の一つとして組み込んでしまっって、会社にも学校にも地域にも、自分が自分であると確かめられる瞬間も居場所もなかなか見付からない。そう諦めかけていた僕をも含む1人ひとりに、安らぎとか優しさとか寄り添いとか、そんな安易で使い古された言葉とは違う、まさに「ささやかだけど、確かなこと」と遭遇できるきっかけを与えてくれる。それがAORなんです。テレビのコメントのように5秒でズバツと言いきれない、けれどもジワツとくる「豊かな音楽」。それがAORなんです。

### Profile

#### ●たなか・やすお

56年4月12日、東京都出身。80年、一橋大学在学中に「なんとなく、クリスタル」で「文藝賞」受賞、ベストセラー作家に。政治経済から若者文化まで鋭くしなやかに論じつつ、ユニークなキャラクターを発揮してテレビでも人気を博す。00年には長野県知事に就任し政界進出。以降、参議院議員、衆議院議員も務めた。14年、「33年後のなんとなく、クリスタル」上梓。15年には、AORの名盤100枚がエッセイ仕立てで登場する84年の名著「たまたなく、アーベイン」を復刻出版している。田中康夫公式サイト <http://tanakayasuo.me>



ステファニー・ミルズ

## SWEET SENSATION

1980年

日本の知名度はマイチだが、ミュージカル出身で、非常に小柄ながらパワフルかつ表現力豊かな歌を聴かせるソウル・シンガー。これはジェームス・エトウ・メとレジー・ルーカスのプロデュースでアーバンな表現を取り入れ始めた頃の作品で、アッパーからスロウまで、80年代型ソウルを先取りした洗練されたスタイルを聴かせる。「名曲『Never Knew Love Like This Before』を聴くためだけでも価値あり」



ルパート・ホルムズ

## PURSUIT OF HAPPINESS

1978年

74年にデビューするも3枚のアルバムは不発。4枚目となるこのアルバムに収録された「Let's Get Crazy Tonight」がようやくの小ヒット。都会的かつ知的なサウンドながらどこか温かい。AORの見本のような「Less Is More」を筆頭に、メロウなソウルダンスナンバーの「So Beautiful It Hurts」はクラブ人気が高い。「名曲『Speechless』を収録の都会的なサウンド」



キャロル・ベイヤー・セイガー

## SOMETIMES LATE AT NIGHT

1981年

日本では松原みき「真夜中のドア/Stay With Me」の元ネタの人としても知られる。元々は作詞家で、歌はヘタウマ。しかし、AORファンにとって、この3rdアルバムはマスト。後に結婚するパート・バカラックとの恋愛中に制作された作品で、全編が1つのストーリー仕立てになった、ロマンティックの極致のような名作。「パート・バカラックの妻。離れ島に1枚だけ持って行くなら迷わずチョイス」



マーク・アーモンド

## OTHER PEOPLES ROOMS

1978年

英国出身のジョン・マークとジョニー・アーモンドのユニット。元々は70年代初頭から活動するバンドだったが、76年に2人のユニットに。アーモンドがサクソフォーン奏者ということもあってか、クロスオーバー方面にも少し踏み込んだジャズかつエレガントなサウンド。派手さはないが、都会的で高品質な作品だ。「ニューヨークの孤独を感じさせるトミー・リビューマ・プロデュースの名盤」



ニック・デカロ

## ITALIAN GRAFFITI

1974年

AORの代名詞のような作品。メロウかつゴージャス。洗練の極致のようなサウンドと非の打ち所がない名曲群。AORのなかでもかなり早い時期の作品で、名アレンジヤーとして名を馳せたデカロが、プロデューサーのトミー・リビューマとエンジニアのアル・シュミットとの3人で作り上げたこのシャれたサウンドこそが、AORの雛形になっていく。「AORの金字塔にして珠玉の入門盤」



バリー・マニロウ

## THE BEST OF BARRY MANILOW

2008年

日本では「Copacabana」のヒットや西城秀樹との共演からショウビズ系シンガーと捉えられがちだが、長い裏方生活を積んだ実力派で、フランク・シナトラなどからも激賞された人。「哀しみのマンディ」やブルース・ジョンストンが書いた「歌の贈りもの」などの代表曲は、ホビュラー系AORの名曲なので押さえておきたい。70歳を越えた現在も現役。「ご存知バリー・マニロウのベスト盤」

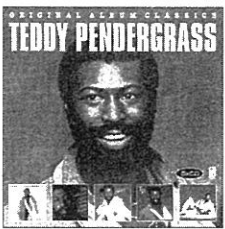


テディ・ペンダーグラス

## ORIGINAL ALBUM CLASSICS

2014年

そのスモーキーなバリトン・ヴォイスで多くの女性を虜にした、フィリー・ソウルの代表的シンガー。ドリフの「ヒゲダンス」の元ネタとしても知られる人だが、ソウル・スタンダードとなった「Love T.K.O.」など、80年代アーバンを先取りしたような名曲も多い。「多くの女性を魅了したテディ。1979年の名曲『Turn off the Lights』収録のアルバム『Teddy』を含む5枚組で、超特価の逸品」



# 別冊 カドカワ Direct 09

カドカワムック No.738

## 別冊カドカワ Direct 09

2018年3月26日 発行

発行人 安本洋一  
編集人 小川純子  
編集長 向井知大

発行 株式会社KADOKAWA  
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3  
電話 0570-002-301 (ナビダイヤル)

印刷・製本 凸版印刷株式会社

ISBN 978-4-04-896267-4 C9476  
Printed in Japan

写真提供 アフロ/amana images

### STAFF

編集 山本理愛  
伊藤素子  
渡辺敏樹 (エディターズ・キャンプ)  
竹内巴里  
及川静  
前田拓 (Cowboy Song)  
岩川悟 (Cowboy Song)

アートディレクション 森玄一

生産管理 成戸泰介

営業 栢卓司

#### KADOKAWA カスタマーサポート

[電話] 0570-002-301 (土日祝日を除く11時~17時)

[WEB] <https://www.kadokawa.co.jp/> (「お問い合わせ」へお進みください)

※製造不良品につきましては上記窓口にて承ります。

※記述・収録内容を超えるご質問にはお答えできない場合があります。

※サポートは日本国内に限らせていただきます。

本書の無断複製(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡および配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

定価は表紙に表示してあります。